

金達寿「八・一五以後」における「異郷」の空間表象

逆井 聡人

0. はじめに

金達寿「八・一五以後」(『新日本文学』の1947年10月号)は、「異郷」であるアジア太平洋戦争敗戦直後の日本を舞台に、在日朝鮮人の主人公が解放後に起きた様々な出来事に心を砕きつつ、同胞をまとめる活動をする様子を描いている。金達寿は解放以後、祖国回復への希求を描いた在日朝鮮人文学の嚆矢とされる作家であり、代表作としては「後裔の街」や「玄海灘」などの植民地時代の朝鮮を舞台にした長編小説などが挙げられる¹。そして、これまでの金達寿を論じたものの多くは、主にそうした長編小説を分析の対象として扱い、同時代の日本を描いた作品は副次的に論じられてきた。

先行研究におけるこの傾向には、ポスト・コロニアル文学としての在日朝鮮人文学をして、日本文学という自己充足的な文学史観に亀裂を入れるという企図がある。在日朝鮮人文学という枠組みは、解放の前後を問わず経験された植民地的状況を日本語で書き記すことによって日本の内部で「その集団的存在の政治性」²を主張するものであるとされる。金達寿はそうした在日朝鮮人文学者の最も代表的な作家として見なされてきた。とりわけ、金達寿の全作品を網羅した崔孝先の『海峡に立つ人—金達寿の文学と生涯』では、解放直後の作品群を「在日同胞生活史」の流れの作品群」として位置付けている。本稿で扱う「八・一五以後」という短編作品も金達寿の伝記的側面の強い作品であるとされている³。

しかしながら、そうした在日組織の運動を伝記的に記したという見方のみでは、このテキストがなぜフィクションとして敗戦直後の日本という空間に提出されたのかという意味を十全に捉えることができない。また、テキストに書き込まれている登場人物たちのアイデンティティのゆらぎや葛藤が在日朝鮮人文学の政治性という括りの中で見えにくくなってしまふ。

本稿では、「八・一五以後」という作品において、在日朝鮮人という民族的主体の形成が抱えるジレンマが「異郷」という言葉に如何に反映されているか、またそうした「異郷」に留まることがどういった意味と可能性を持つかということを探ることで、敗戦直後の日本という空間を在日朝鮮人の目線から捉え直すことを目的とする。以下では、次の手順で論を進める。まず、同時代の日本の言説空間において、この作品及び作家金達寿にどのような評価が与えられていたかを確認する。次に、人物類型に着目し、この作品がフィクションとして提出されたことの必然性を明らかにする。そして、1950年の改稿がオリジナルのものから削除したものと加えたものの意味を1950年前後の独立運動の言説を背景にして考察する。その上で、この作品における「異郷」という言葉と民族意識の関わりを検討する。その際、同時代に存在した闇市という空間と在日朝鮮人社会との関係に言及し、その空間の特性が「異郷」という語が持つ緊張

1 「後裔の街」(初出:第一章~第二章『鷄林』(同人回覧雑誌)1944年、第三章~完結『民主朝鮮』1946年4月~1947年5月)、「玄海灘」(初出:『新日本文学』1952年1月号~1953年1月号)。

2 中根隆行『〈朝鮮〉表象の文化誌 近代日本と他者をめぐる知の植民地化』新曜社、2004年、264頁。

3 崔孝先『海峡に立つ人—金達寿の文学と生涯』批評社、1998年、19~20頁。

関係に如何に結びついているかを示す。そして最後に「異郷」として敗戦直後の日本を眼差すことの可能性を明らかにする。

1. 「八・一五以後」発表時の『新日本文学』と金達寿評価

「八・一五以後」は雑誌『新日本文学』に掲載された金達寿の最初の作品である。以降、『新日本文学』は金達寿の主な発表の場の一つとなった。それまでは彼が自ら編集・執筆を行っていた雑誌『民主朝鮮』が唯一の創作発表の媒体であり、そうした意味では「八・一五以後」は外部に発表された最初の作品でもあった。この『新日本文学』への金達寿のデビューは、当時気鋭の文芸評論家であった小田切秀雄によって導かれた。小田切は『民主朝鮮』の創刊号から連載されていた「後裔の街」を読み、金に新日本文学会への加入を勧めた⁴。そして、入会直後の46年10月末に開催された新日本文学会の第二回大会において、金達寿は常任中央委員に選ばれた。

しかし実のところ、金達寿の『新日本文学』誌上への本格的なデビューはすぐさまなされたわけではない。高榮蘭は、金達寿が早い時期において常任中央委員に選ばれているにもかかわらず、創作を含めた彼の文章が誌上に掲載されたのは僅か三回であったことを指摘している。それが1949年を境として、金達寿だけでなく許南麒などの朝鮮人の書き手の創作が掲載されることが増え、この時期以降に朝鮮人作家が高い評価を受けるようになった。高は、こうした在日朝鮮人作家に対する評価の変化は『新日本文学』誌上で展開された1950年前後のサンフランシスコ講和条約をめぐる言説が影響していると分析している。それは「日本民族」がアメリカからの「被圧迫民族」であり、その点においては植民地時代の「朝鮮民族」と同一であるとする、日本共産党周辺の知識人が用いた論理であった。つまり在日朝鮮人作家評価の背景には「日本民族」と「朝鮮民族」の「民族的連帯」を提示することで、「日本民族」の被害者を強調する意図があったのだ⁵。

それでは、小説「八・一五以後」が発表された当初の金達寿に対する評価は如何なるものだったか。「八・一五以後」が掲載された号の「編集覚え書」には次のような評価がなされている。

現在、在日本朝鮮人作家はその数においては必ずしも多くないが、朝鮮内地の文学運動の目覚ましい発展に呼應して、これまで抑圧されていた才能のありつた を あ ふ れ 出 さ せ よ う と し て い る。在 日 本 朝 鮮 人 と い う 特 殊 な 位 置、朝 鮮 人 が 日 本 語 で 小 説 を 書 く と い う こ の 問 題、等 々 直 面 し て い る 複 雑 な 問 題 も 少 な く な い が、か れ ら は そ れ に め げ ず に 進 む だ ら う。(略) 朝 鮮 の 近 代 文 学 は 「 白 樺 」 派 の 影 響 の も と に そ の 時 代 に 成 立 を は じ め た が、日 本 の 文 学 者 と の 積 極 的 な 交 渉 が つ く ら れ た の は 昭 和 初 年 の プ ロ レ タ リ ア 文 学 の 時 代 で あ り、日 鮮 文 学 者 の こ の 平 等 な、自 主 的 な 提 携 は 日 本 の 支 配 権 力 の 層 族 政 策 に 對 立 し て 日 本 人 民 の 名 譽 の 記 憶 と な つ て い る。

(下線・引用者)

4

「わが文学と生活(六)「民主朝鮮」と「新日本文学」のこと」『金達寿小説全集五』筑摩書房、1980年、344頁。

5

高榮蘭『「戦後」というイデオロギー 歴史／記憶／文化』藤原書店、2010年、「第7章 「植民地・日本」という神話」の議論(特に281～298頁)を参照のこと。

ここでは、「在日本朝鮮人という特殊な位置」を指摘しながらも、あくまで「朝鮮内地の文學運動」に「呼応」した副次的なものとして捉えており、プロレタリア文學運動の記憶を召還しながら日本の支配権力に対する「連帯」が強調されている。ここから分かることは、「在日朝鮮人文学」は「朝鮮文学」に内包された一形態であって、同時代の日本で日本語によって書かれた作品であるにもかかわらず「朝鮮人／日本人」という線引きが前提になっていることである。また「日本語で小説を書くことの問題」を「めげずに進むだろう」という言い方には、日本語でしか書けないという「宗主国の敗戦と同時に出現した在日朝鮮人の言語・文化的な植民地状況」⁶に対する突き放した態度が見て取れる。かつてのプロレタリア文學運動期における支配権力への「連帯」的対立を賛辞しながら、植民地時代から継続して「直面」している在日朝鮮人の言語的問題に対しては距離を置いているのである。

こうした『新日本文學』側の態度は、金達寿をはじめとした在日朝鮮人文学者の作品を「解放民族」の文學として囲い込むことに繋がっている。そして、そこには1950年前後における、アメリカに対して「日本民族」を「朝鮮民族」と同一視するような論理がこの時点においても見出せるのだ。つまり、『新日本文學』側の在日朝鮮人文學評価は、「朝鮮民族」というエスニック・アイデンティティを前提にしており、またその「民族」性を予定調和的に確認することに終始しているということだ。

「八・一五以後」の発表当時の金達寿に対する評価は上記のように「朝鮮人」という「民族」を『新日本文學』という雑誌上に顕在化させることに力が置かれていた。先にも述べたように、こうした評価の在り方は「日本」と「朝鮮」を対置させながらも、大枠では「日本」の内部に「朝鮮民族」を位置づけるような不均衡な比較関係が成り立っている。しかしながら実のところ、「日本人／朝鮮人」という二項的図式を用いての言説戦略は解放運動を主導する朝鮮人運動家にも共有されたものであった。次節以降では、作品における人物造型と「解放」以後の独立運動の主体形成について考察する。

2. フィクションの形式と人物造型

「八・一五以後」では、当時の在日朝鮮人を取り巻く政治的・社会的状況が描かれており、そうした作品内での出来事は歴史的事実と相違しない。また登場人物の行動も金達寿とみなされる主人公・李英用や元容徳をモデルとした宋庸得など、金達寿の自伝と照合しても一致している。自伝の中でも「解放」直後の出来事を「八・一五以後」という短編にも書いている」と言うように、ほぼ作者が体験したことがこの小説に書かれていると考えていいだろう。そうしたことから先行研究でもこの小説の自伝的な側面に注意を向けてきた。しかしながら、作品「八・一五以後」は自伝ではなくフィクションとして発表されたものである。このことを如何に考えればよいか。本節ではまず、この作品に現れる三人の人物造型に着目することで、フィクションという形式の問題を考える端緒としたい。

まず、「八・一五以後」は大きく四つの場面に分かれる。冒頭部は、在日朝鮮人が「解放」以後に置かれた状況と組織（在日朝鮮人連盟、朝連）結成などの歴史的事実に

基づいた記述、及び主人公「李英用^{リヨンヨン}」自身が経験した妻の死と母の抑留という二つの「不幸」に関する経緯が提示される。次の場面では「宋庸得^{ソングヨンドク}」という友人と共に佐世保の収容所に抑留されている母を迎えに行く様子が描かれている。三つ目の場面では大阪に住む従兄、「河圭秀^{ハギョウ}」の自宅で一晩休息をとり、結末部では宋と分かれた英用と母が自宅へ戻り、英用は妻の死を母に伝える。

この作品において英用と行動を共にする宋の存在は、英用に独立運動家としての手本を提示する重要な役割を持つ。宋には、「元谷徳」という実在のモデルがいる。彼は「立教大学の経済学部を出たクリスチャンのマルクス主義者」で「十月十日、マッカーサーの政治・思想犯釈放指令によって出獄した」左派知識人の運動家であった⁷。宋は、独立運動を主導する人物として一貫した論理と行動指針を持ち、度々英用を助け、時に叱咤激励する人物である。

宋の運動家としての一貫性は、彼と佐世保の朝連支部の外交部長「黄一文^{ファンイルムン}」との口論の際によりいっそう露になる。黄は、朝鮮人が「解放」後に故郷へ戻ったにもかかわらず再び密航船で日本に引き返している状況に対して、「いくら同胞と言っても密航ということは良くないこと」であり「日本にとっても迷惑」であると発言する。発言からも分かるように、この作品のなかで黄は、帝国日本の植民地主義的論理が内面化された「朝鮮人のうちにしばしば見受ける半知識人」⁸として描かれている。こうした黄の考え方に対して宋は「君はなぜそのよくないことが行なわれているのだからを少し考えて見たことがありますか」と問い返す⁹。黄は宋の発言を受け入れず、「日本の文化」は「古いわれわれの文化」から来たのであり、それに見合った「一等国民」としての自覚を持つべきだと訴える。

朝鮮人を「一等国民」とする黄の論理は、一見すると日本に対する民族的抵抗の様に捉えられる。しかしそれは、かつて帝国日本が朝鮮人を「帝国臣民」として取り込もうとした「同化政策」における「日鮮同祖論」の言説を反対側からすり直したものであると言うことができる¹⁰。そうした意味で黄は無意識的にも植民地主義が深く内面化された存在であるのだ。一方で、宋はこうした黄の発話に対して激昂するも、「君もその傷痕を背負った一人なのではないか」と眩く¹¹。こうした宋の眩きは、朝鮮人内部において、「解放」以後であってもその思考の植民地的状況が根強いものであることに対する嘆きである。この嘆息は「教育すべきものそれ自体がまたその(奴隷的教育の)残滓を蔽い被っていることである」¹²と述べる語り手にも共有されている。また、佐世保の朝連支部自身が「委員長や幹部というものを、日本の町会長などを見習って名誉職のように考えている」ということから、「解放」後の朝鮮人たちの間にある思想的な植民地状況を見て取ることができる。

母を引き取った後、英用と母と宋の三人は大阪で河村という名で「キャバレー」を経営して成功している従兄の河圭秀の宅へ寄る。「でっぶり」として日本人と区別がつかない顔を持つ河圭秀は英用に「金さえあれば誰にだって馬鹿にされることがあるものか、独立したって何だって君、金だよ」と金齒を光らせながら笑う。不快に思った英用と宋は母を連れて翌朝早々に河の家を出る。この河圭秀という人物は、先の外交部長の黄と同様、在日朝鮮人が必ずしも一様でないことを示す存在である。河圭秀はおそらく独立運動には積極的に参加しない人物であろう。しかし彼の「金があれば馬鹿に

7
金達寿「わが文学と生活(六)」前掲、334頁。

8
本文、152頁。引用は『金達寿小説全集』筑摩書房、1980年による。

9
この宋の反論は、当時の朝鮮の政治情勢に重ねてみるならば、アメリカ軍政と李承晩の復権が挙げられる。アメリカ軍政はまず右派反共の李承晩を迎えて政治勢力を育て、南朝鮮内部の共産党に弾圧した。そのため、植民地時代の総督府に協力的だった保守的エリート層の権力と特権はそのまま保存されることとなった。このことからも、在日朝鮮人の存在は単に日本政府との二者関係だけではなく、日本と日本占領軍、朝鮮半島のアメリカ軍政、そして後に確立する李承晩政権、さらには北朝鮮に進駐するソ連と人民委員会という幾層もの権力構造の狭間に位置されていることが分かる。

10
小熊英二『日本人の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998年。「第8章 「民権」と「一視同仁」」における議論を参照。

11
本文、153頁。

12
本文、148頁。括弧内は引用者。

されない」という発言や、解放後に「河村圭秀」という日本名の表札の脇に小さく貼出した「河圭秀」という朝鮮名を記す名刺が彼なりの民族的葛藤と闘争を、ひいては日本人社会に積極的に同化しようとする人々の苦心を示していると言えるであろう。

このように本作品の人物造型には、当時の在日朝鮮人の間にあった思想的差異がよく示されている。そうした差異が強調された登場人物が提示された理由をどこに求められるだろうか。金達寿は『民主朝鮮』の創刊を思いついた際のことを以下のように書いている。

その提案というのは、「朝鮮と朝鮮人とに対する日本人の誤った認識を正すための雑誌を出したいと思うがどうだ」ということだった。私としても突然思いついたようなかたちだったが、しかし考えてみると私は八・一五直後の激動のなかでしばらくそのことを忘れたようになっていたけれども、潜在的にはその考えをずっと持ち続けていたのである。¹³（下線・引用者）

「誤った認識を正す」という金達寿の意気込みは、『新日本文学』という日本人読者の多い雑誌に初めて投稿することになった「八・一五以後」という小説に揚々に込められていたことが予想できる。そうであるならば、一様に認識されていた在日朝鮮人の本来の多様性とその内部における葛藤を的確に表現する必要があったのだろう。だからこそ、宋庸得や外交部長の黄一文、そして実業家の河圭秀という登場人物に独立運動家、植民地主義を内面化した人物、日本社会に同化する人物という、それぞれ当時の在日朝鮮人における典型的な人物像が割り当てられ、対立する場面が描かれたのだ。

また作者の意図の有無は別として、英用の妻と母にもまた典型的な「母」の表象としての役割が担われていることを読み取ることができる。すなわち民族主義的な独立運動の場における自己犠牲的な女性像である。英用の母や妻は作品の中では名前が出てこない。殊に妻は「子供を産み落として」直後に死亡する¹⁴にもかかわらず、その「子供」は、英用の母の言葉の中で「^{メイグキョン}明均」という名が出ており、自伝と照応すると男性の子供であることが分かる¹⁵。

この小説において、英用の妻や母は民族主義運動の闘士を「生む」ためだけの献身的な役割であり、女性という性はイデオロギーに使役される無性的（asexual）な「母」として存在している¹⁶。名前を与えられない英用の妻の、テキストにおける存在は、物語内部での彼女の沈黙と不在によって、民族主義的言説に支えられる独立運動の内部で再生産される抑圧の構造を暴露していると言えるであろう¹⁷。

「八・一五以後」における登場人物の類型化は、当時の在日朝鮮人の内部の葛藤と軋轢を明示している。それらの人物たちがそれぞれの立場を明に暗に主張する場としてフィクションという形式は機能していると言える。それでは、本作の主人公である李英用はどのように類型化されていると考えるべきであろうか。ここに、この作品における重要な問題を見出すことができる。それは初出から1950年5月に発刊された単行本『叛乱軍』収録の際の大幅な改稿である¹⁸。

13

金達寿「わが文学と生活(六)」前掲、335頁。

14

本文、145頁。

15

金達寿「わが文学と生活(七)」『金達寿小説全集二』筑摩書房、1980年、425頁。

16

高榮蘭前掲書、344頁でエレイン・キム『危険な女性—ジェンダーと韓国の民族主義』（朴ウンミ訳、サムイン、1997年、韓国語）を引用しつつ、民族主義に使役される「母」表象について論じている。

17

上野千鶴子は「慰安婦」に沈黙を強要した根本的問題である「家長制パラダイム」を論じるにあたり、「民族言説は女性を「民族主体」のなかに取り込むことによって（略）ナショナリズムの動員のために利用する」と指摘している（『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998年、131頁）。

18

「八・一五以後」は『叛乱軍』（冬芽書房、1950年5月）、『朴達の裁判』（東風社、1966年6月）、『小説在日朝鮮人史』（創樹社、1975年7月）に収録されている。

3. 改稿の問題と運動主体

まず目に付くのは、およそ2500文字にわたる部分が削除されていることである。その箇所では、英用が数人の朝鮮人青年に向って白頭山に潜伏して日本軍と戦った金日成や中国の「同胞義勇軍」を挙げながら雄弁に団結を説くところから始まり、しかしその途中で「僕のように新聞社にいたことのあるものは敵であつた彼らの戦意を煽り立てたのだ」と述べた際に、「激しい後悔」に立ちすくむ様子が描かれている。その後、日本に来てから日本の敗戦に到るまでの英用の軌跡が語られる。英用が「みんなは僕を許してくれるのですか、許してくれるのですか。」と叫んだ後、「同胞の団結を誓って」「組織に着手した」という心情の推移が記されている。以上がそのまますっかり削除された箇所である。さらに、組織作りに奔走する場面が描かれた後に、「犯した自分の負い目がわずかでも軽減されたことに無限の喜びを感じるのだった。彼は働いた。彼は駆けまわった。」という一文が削除されている¹⁹。これらの大幅な削除箇所には、英用が組織的な独立運動にコミットするに到る心情が事細かに示されている。そしてそれ以外に削除されたところは、自らの「負い目」に関して言及する箇所である。

まず「新聞社」にいたことが「後悔」と「負い目」を英用に与えたということはどういうことか、考えてみたい。英用は戦時中、新聞記者として、帝国日本の戦意を高めるための記事を書いていたことが分かる。しかし、日本の敗戦による解放の後、民族組織である「朝連」の指導的立場として在日同胞を祖国の独立に向けて団結させる役割を担うことになる。その際に、直近の過去において日本の帝国主義を支えるような言説を生み出していた自らの経験が「負い目」として現在の自分の在り方にジレンマを与えることになるのだ。

改稿以前のテキストには、日本の帝国主義に加担した「負い目」を抱え、自らの過去と葛藤する自己認識のゆらぎが確かに描写されている。尹健次の言葉を借りれば、「〈内なる天皇制〉との深刻な対決」を経てアイデンティティを形成しなくてはならなかった在日朝鮮人の姿が、テキストに刻まれていると言うことができるだろう。削除箇所で語られている英用の組織運動へのコミットメントのあり方は、「過去の「親日」的行為をひた隠しに隠し、自己と天皇(制)についての関わりについては沈黙し、ただひたすら日本・日本人を告発し、また新生の民族・祖国をさげびつづけることがひとつの現実的な生き方」²⁰であったとする尹の説明と相似している。

では、こうした〈内なる天皇制〉を背負い葛藤する人物造型が1950年の改稿段階で削除されることの意味は何か。作者の金達寿は、自伝その他の論考で自身の戦時中の行動について言及しており、小説「八・一五以後」が単行本に採録される時点で、そのことを殊更隠し立てしようという意図があったとは考え難い。むしろ1950年という時空間、とりわけ当時の在日朝鮮人をめぐる言説空間が、作品に要請した構造的変化に目を向けるべきであろう。

そもそも解放直後において、在日朝鮮人の中でも祖国に対する認識の在り方は多様であった。小説「八・一五以後」においても、皇民的イデオロギーを内面化させた黄一文や、日本人社会への参入を試みる河圭秀のような人物にその多様性の一端を見出せるのは先に論じた通りである。しかし、1948年8月(大韓民国)と翌月(朝鮮民主主義

19

金達寿「八・一五以後」『新日本文学』
1947年10月号、40～41頁。

20

尹健次『「在日」を考える』平凡社、130～
131頁、2001年。

人民共和国)に実体としての祖国が朝鮮半島に形成される。それを契機として、民団(在日本大韓民国居留民団へと同年10月に名称変更)と朝連は、前者が同年9月、後者が翌年2月に、それぞれの国家への帰属を表明する。そして1950年6月に勃発する朝鮮戦争が、それぞれの祖国と在日朝鮮人一般の意識の一義的な結びつきに拍車をかけていく。

外村大は、こうしたどちらか一つの祖国と一義的な結びつきを図ろうとする意識の在り方を「祖国志向型ナショナリズム」と名付けた²¹。しかしそうした民族が祖国という国家に所属しなければならないという意識は「結果として、「日本社会は日本人のみによって構成される」という日本人の意識と裏／表の関係にあったのである」と外村は指摘している²²。こうした自らを日本人から分離し祖国と一義的な結びつきを図ろうとする在日朝鮮人社会内部の意識は、「八・一五以後」という小説、及び主人公の人物造型にどのような影響を与えたのであろうか。

「八・一五以後」が単行本に収録されるのは1950年5月であり、まさに朝鮮戦争勃発の直前である。当時において、民団、朝連共に在日朝鮮人社会の指導部には強固な「祖国志向型ナショナリズム」が浸透していた。「八・一五以後」という小説の主人公は、独立運動を導く立場でありながら、その活動のモチベーションは自分の過去の「負い目」の軽減にあったわけであるが、この1950年という時点においてそうした主人公の在り様は許容されなかったのではないか。つまり、1950年の改稿において作品内の英用の言動には「祖国志向型ナショナリズム」に沿って民族主義思想の「純化」が施されたと考えられる。この英用の思想における「純化」の操作は、オリジナルのテキストが英用に担わせていた類型的役割、すなわち過去の「負い目」と闘う朝鮮人知識人像を排除し、1950年における独立運動を先導するに相応しい人物造型へと書き換えてしまったと言えるだろう。それは宋庸得的な運動主体への同化でもあるのだ。

4. 「異郷」の内実一帰郷と同化の狭間としての闇市

それでは英用や宋のような運動主体は日本という空間を如何に眼差しているのだろうか。また、彼らが行動する舞台は「八・一五以後」という小説の中でどのように造型されているのだろうか。本作品において日本を表す「異郷」という言葉は度々登場しているため、「異郷」の内実を探ることが本作品の舞台である敗戦直後日本という空間を考えることに繋がる。まずは、「八・一五以後」の導入部に遡って見てみよう。

人々は起ち上がった。

長い年月を酬いられることもなく、蔑まれ、虐げられた底からえいえいと築いてきた生活はまるで夢のことにように投げ捨て、祖国へ、独立の朝鮮へと雪崩を打った。人々は一夜のうちに数年、或いは数十年の生活を一本の麻縄や風呂敷にくるんでただわれを先にと急いだ。日本の駅頭はこれらの群集、今や希望にさざめき、叫喚する群集で埋まり、下関、博多などの港は日夜これらの群集によって占拠された²³。

21

外村大「第六章 日本敗戦と在日朝鮮人社会の再編 第三節 戦後における在日朝鮮人の意識と活動」『在日朝鮮人社会の歴史学的研究—形成・構造・変容』425～458頁。

22

外村同書、449頁。

23

本文、144頁。

24
本文、144頁。

25
渡邊一民『(他者)としての朝鮮 文学的考察』岩波書店、2003年、141頁。

26
解放後の朝鮮半島において北緯38度線を境界とした南北の政治的闘争は実のところ既に戦時中の国際政治情勢に規定されていた。そもそも38度線は旧日本帝国における関東軍と朝鮮軍の軍管区の仕切り線であったが、日本敗戦直後にはこの境界線上に米ソ冷戦構造が上塗りされる。(姜尚中、小森陽一『戦後日本は戦争をしてきた』角川書店、2011年、101～103頁)

27
本文、146頁。

28
占領初期日本における連合軍の出入国管理体制に関しては、マシュー・オーガスティン「越境者と占領下日本の境界変貌—英連邦進駐軍(BCOF)資料を中心に—」(『在日朝鮮人史研究』2006年10月)、強制収容所に関してはTessa Morris-Suzuki, *Borderline Japan - Foreigners and Frontier Controls in the Postwar Era*, Cambridge University Press, 2010に詳しい。

29
Morris-Suzuki, *Borderline Japan*, pp59-60

30
本文、144頁。

31
鈴木久美「在日朝鮮人の帰還援護事業の推移—下関・仙崎の事例から—」(『在日朝鮮人史研究』、2006年10月)において下関・仙崎に置ける闇市の形成と山口県を主体とした取締りについて詳しく論じられている。また、小林聡明「朝鮮人の移動をめぐる政治学」(『近代アジアの自画像と他者』京都大学出版会、2011年)は当時の在日朝鮮人と闇取引の関わりをGHQの資料から具体的に見た論考として特に重要である。

32
初田香成『都市の戦後 雑踏の中の都市計画と建築』東京大学出版会、2011年。

この導入部においては解放に際して、喜びの噴出する人々の姿が描かれている。そこに「異郷」という言葉が登場する。「彼等は異郷で右往左往し、ただ下関へ、博多へと寄り寄り」(下線・引用者)ながら移動した²⁴。日本に在住していた約三百万人にもおよぶ朝鮮人の多くは故郷に戻ることを望み、GHQの指導で11月によく実行された日本からの計画輸送によって、またはそれを待たずに自力で朝鮮半島へ渡って行った²⁵。しかしながらそうした人々は、制限された所持金千円を手に釜山港に到着するも、南朝鮮のアメリカ軍政²⁶は彼らへの対策をとらなかった。生活の糧を得られない人々の中には、少なくとも見知った人々がいる日本へ—「手馴れた昨日までの生活がある異郷」(下線・引用者)へと、引き返す選択をとるようになる²⁷。

こうして日本に許可無く「再入国」した場合、「密輸」を行う「密航者」として見なされ、仙崎や佐世保に急遽建てられた強制収容所に収監され、強制送還を待つこととなった²⁸。テッサ・モーリス＝スズキは、当時のワシントンからSCAPに送られた日本人以外の外国人に関する指令書を分析した中で、こうした在日朝鮮人に対する処遇は「解放国民」と呼びながらも、優先順位の低い存在としてアメリカ本国から見なされたために生じた法的に不確定さによって起きたと分析している²⁹。小説「八・一五以後」の英用の母親は、先にみた佐世保の強制収容所に収監された一人であった。

このように本作品に出てくる「異郷」という言葉には、日本列島と朝鮮半島という二つの空間の移動における緊張関係が内包されている。そして、冒頭部ではさらに「異郷」で船を待つ在日朝鮮人たちがいる特殊な空間を形成していることが分かる。それが闇市である。

そこではすでにこの漂白の生活に手馴れた人々によって焼野原に板や菰の囲いがされ、焼トタンの屋根が張られて応急の必要におうじた飲食店が軒を並べて現出した。そして喜びに気負い立った人々の濫費がそこに吸いとられていった。しかし、これを吸いとる側もまた気負い立っていた。そのような利益などは人々の眼中になかった。船が来るとこれらの人々もそのまま店を後から到着した人々に譲って、万歳の声に送られて玄海灘を渡っていった³⁰。

在日朝鮮人や中国人、台湾人などの旧植民地出身の人々を「解放国民」として処遇するというGHQの声明が出されたのは1945年11月3日のことであるので、解放直後であるこの時期はまだ日本の総力戦体制下にあり、配給以外の飲食の交換及び売買は違法であった。そのために特別な許可のない飲食店の集まる空間は「闇市」と呼ばれていた³¹。そして当時の闇市の評判は、闇値によって暴利をむさぼるものとして非難されており、それ故に日本という国家を墮落させる「道義に悖る」ものであるとされていた。そうした闇市に対するイメージは、現在に至るまで引き続き残っている。しかしながら、近年の闇市に関する研究においては、従来の激烈で悪徳な闇市像を見直し、闇市という空間が、庶民の生活にとって急激な戦後体制への変革に対応するための媒介的役割を担ったという見方が提出され始めている³²。

「八・一五以後」の導入部で見られる売買は「利益など人々の眼中になく、船がくれば早々に店を人に譲ってしまうようなものである。法的には未だ旧宗主国の支配下

にある朝鮮人が応急の闇市で日々の生活を凌ぎながら独立した朝鮮に帰郷する、という状況が見出せるこの作品における闇市の様相は、まさに近年の闇市研究が指摘しているような急変する社会との折衝が行なわれる空間として現れているのである。さらに、半島の実状が明らかになるにつれて、故郷に戻ることでできない朝鮮人は日本人社会一般と同化せざるを得なくなる。在日朝鮮人の経済史を研究する韓載香は、植民地時代の日本における朝鮮人の集住的コミュニティから戦後の散在型への移行が促され、その同化の過程の中で敗戦直後の「ヤミ業」は一定の役割を果たしたと述べている³³。

小説「八・一五以後」の導入部に見られるのは、日本という「異郷」から闇市を経由して朝鮮へ帰郷するという動線である。しかし実際には、在日朝鮮人社会が戦後迎った日本人社会への同化という真逆の方向性がある。それはテキストにおいても母の抑留や河圭秀という存在によって示されることである。この闇市を媒介として「異郷」において行われた、帰郷と同化という移動の緊張関係は、本作品を読み解く上で非常に重要なものとする。そして、この緊張関係が生み出す「異郷」の内実は、テキストにおけるもう一つの削除箇所について言及することで明らかになる。

それは物語の最終部分、自宅に帰った英用が初めて母に妻が亡くなったことを伝え、遺骨を見せる場面である。泣き崩れる母の隣で留守中にたまった新聞紙を開いた時に「兇悪・二人組拳銃強盗捕まる」という見出しをみつけて、そこに載った「東京都淀橋区××町一二徐斗竜(二三)」という名前を目にした英用は涙を流す。そして母を置いて朝連本部にむかって家を出て行くところでこの物語は終わる。次の箇所は英用が泣き崩れている母を家に残して朝連の本部へと出掛けていく最終場面である。

「今日は早く帰れるかい」といった。

英用は一つ頷いて、面へ出て行つた。歩いた。「すべてはこれからだ」という宋庸得の言葉が彼の唇を突いて出た³⁴。(下線・引用者)

下線部の部分が、単行本からは削除されている。闇市で「拳銃強盗」として捕らえられた在日同胞の新聞記事とこの削除部分の結びつきをどう捉えることができるだろうか。

「淀橋区」とは今の新宿区の一部の地域にあたり、新宿駅周辺には巨大な闇市が複数存在した。猪野健治の『東京闇市興亡史』によると、当時闇市にはびこる暴力沙汰は在日外国人と強く結びついて認識されていたと指摘している³⁵。大宅壮一も1952年9月に『中央公論』誌上に掲載された「在日朝鮮人の生活と意見」という座談会において「朝鮮人と共産主義、朝鮮人と火焰ビン、朝鮮人とやみ、朝鮮人と犯罪というふう」に、常に密接に結びつけて印象され、強く頭に入っている」ことを指摘して、そうした偏見を取り除かなくてはいけないという発言をしている³⁶。大宅の言うように、「やみ」の問題は戦後社会全般にわたるものであり、在日朝鮮人だけが特別に闇取引きと結びついていたわけではない³⁷。しかしこの物語最後に登場する新聞記事にある「凶悪」「拳銃」「淀橋区」「徐斗竜」という言葉によって、英用は日本における朝鮮人が今後も受ける偏見と行く先の暗さを感じざるを得ないのだ。改稿前の原稿では、一番最後に、

33

韓載香『「在日企業」の産業経済史 その社会的基盤とダイナミズム』名古屋大学出版会、2010年、16～17頁、および43頁。

34

金達寿「八・一五以後」『新日本文学』52頁。

35

猪野健治『東京闇市興亡史』草風社、1978年8月、24～26頁。

36

「特集 在日朝鮮人の生活と意見」『中央公論』、1952年9月号。この座談会では、「やみ」と結びつける偏見の弊害だけでなく、強制送還、帰化、思想対立、教育問題など敗戦直後の日本の政策に取り残された在日朝鮮人の苦境を総括した注目すべき座談会である。

37

闇市は敗戦直後の民衆の混乱や「不道徳性」を示す例として頻繁に挙げられるが、実際に流通したヤミ物資は戦中の軍や高級官僚が隠匿した食料や軍需物資を横流ししたものであった事も多く、戦中の権力者が戦後もそのまま経済的有力者として存続したことは、ジョン・ダワーが『敗北を抱きしめて』（三浦陽一・高杉忠明訳、岩波書店、2004年、124～134頁）の中で具体的に説明している。

「すべてはこれからだ」という言葉があることによって、それでも歩み出していくという希望が残っていたように感じられる。しかし、この言葉が削除されることで、未来への志向性が断たれ閉塞感のみが残るように思える。

ここで再び、テキストの冒頭の部分に戻ってみる。先に、冒頭で描かれている闇市を媒介とした「異郷」の日本から朝鮮へという解放感に満ちた帰郷の動線は、現実的には反転した在日朝鮮人の日本社会への同化という動線との緊張関係を生じさせていることを指摘した。こうした二つの動線の反方向性は、行き場のない硬直した空間をテキストの内部に生み出す。ここにおいて、このテキストにおける「異郷」という言葉の内実が見えてくる。それは本作品において、「異郷」という言葉には民族性が前提にされているということである。それは次の引用で確認できる。

英用は朝鮮の老婆がこうして泣き出せば、ある限度が来るまでは止めても仕方がないことをよく知っていた。ことに母は若くして未亡人となり、英用を女手一つで異郷で育て上げて来ながらこうして何度も泣いた。英用はその涙のうちにこうして成人したのである³⁸。(下線・引用者)

38
本文、161頁。

「異郷」とは他の民族の「郷」であり、本来従属しない者からの視点による名付けである。1950年における「祖国志向型ナショナリズム」によって在日朝鮮人社会の内部には「日本人／朝鮮人」という民族的対立図式が強まる。本作品においても改稿という作業を通すことで、その民族的図式の強度は明らかに高められたのである。そのため一方の民族の側から他方を見る「郷」の異質性はさらに高まる。つまり、そうした異質性の高まった「郷」に留まり生活のために同化せねばならないジレンマが、このテキストにおける「異郷」の内実なのである。

冒頭部にはさらに「万歳、万歳！／朝鮮独立万歳！」という言葉が刻まれている。この言葉が、1919年の三・一萬歳運動で叫ばれた言葉と同一のものであることは、改めて指摘する必要があるだろう。日本敗戦を機に「解放民族」となった在日朝鮮人は、朝鮮戦争が近づくと自ら「祖国志向型ナショナリズム」の発展と確立にそって民族的同一性を高めていく。こうした際に帝国日本の植民地期における三・一萬歳独立運動の民族的記憶が召喚されるのだ。しかしそうした民族性の強度が高まる程、「異郷」に留まらざるを得ない状況に極度の緊張状態が生じる。「八・一五以後」が示すポスト・コロニアルな状況とはそういうものである。すなわち「戦後日本」という閉ざされた「異郷」の空間の内に押し込まれ、しかし「解放民族」という言葉によって排除され、同時に自らもその民族という言葉とその記憶に規定されてしまうようなアイデンティティの宙吊り状態がそこに記されることとなるのだ。

5. 「異郷」に留まることの可能性

これまでみてきたように解放直後の在日朝鮮人を描いた小説「八・一五以後」における「異郷」という空間は、民族的主体を立ち上げる際にその代償として自らが排除され

ながら同時に包摂されるような空間である。こうした空間性はテキストの他の部分にも見出すことができる。最も排除されつつ包摂されているという空間の顕著な例として英用の母が収監されていた佐世保の強制収容所がある。

佐世保は「相当に破壊されて片側だけの街」であったのだが、その佐世保の焼跡は暗緑の山に囲まれていた。その風景に英用と宋は「開城に似たところがある」と述べる。その山の中の元海軍の施設が「H収容所」として使われている。語り手はこの収容所の内部を次のように述べる。

三方を山に囲まれていて峠を越えると突如表れた建物の街がそれであった。蒙をはいた女たちが疲れ切った様子で子供を背にし、水を運んで洗濯をしていた。高い木造の兵舎と兵舎の間には単色のチョゴリやチマヤ、子供のむつきなどが紐につるされてひらひらしている。どこからどのようにして作ったのか洗濯の女たちはバングamani(きぬた)を振りあげていた。どこにいても洗濯の好きな女たち。英用は眼を向けて、濃緑の山を見た³⁹。

39

本文、154頁。

開城に似た山に囲まれた空間は、郷愁を誘うような「のんびりとした」風景であった。ここに顕在化する「郷」の空間は、しかしながら「闇を働いた不法な朝鮮人」として「異郷」から排除され、一カ所に収容されたことによって生産されたものである。

この収容所と同様に大阪の焼跡に立つ河圭秀の自宅は、英用が「やまごついた」程日本風の見え目であったが、庭の植木は朝鮮人の趣向であったり、また玄関で和服の女中が出てきたあとに、奥から朝鮮服の夫人が出てきたりというように、内部空間に「郷」を感じさせるような空間構成になっていることをテキストから見出すことができる。こうした抑圧的・排他的な「異郷」において「郷」の空間を見出す、または作り出す行為に何を読み込むことができるか。

アンリ・ルフェーブルは『空間の生産』において、均質化された空間に対峙する「差異」の空間について次のように述べている。

差異は、均質化の周辺において自らを維持し、あるいは均質化の周辺から生じてくる。この際の出現は、抵抗とか、あるいは外部性(側面的性、異常な位置に発生する異所性、異種構造性など)という形式をとる。異なるものとは、初めのうちは排除されたものである⁴⁰。

40

アンリ・ルフェーブル『空間の生産』奈藤日出治訳、青木書店、2000年、535～536頁。

ルフェーブルの読解から、排除された空間の可能性を論じた篠原雅武は、「こうした差異の空間が均質空間を成り立たせている論理とは別の論理を提案させていくことの可能な拠点ができる」と主張する⁴¹。

41

篠原雅武『空間のために 遍在化するスラム的世界の中で』以文社、2011年、197頁。

本論に則して言えば、「民族」という言葉によって「戦後日本」を「異郷」たらしめる認識には、その中で生きていかななくてはならない在日朝鮮人のアイデンティティのジレンマが孕まれている。しかしながら、「戦後日本」において差異を示し続ける在日朝鮮人という存在とその歴史は「異郷」である「戦後日本」という空間に対してだけでなく、それを構築した国民国家の枠組み、そして法による排除と囲い込みの仕組みを

構築した近代的論理とは別の論理を、抵抗として提示する可能性を持っていると言えるのではないだろうか。そうした視座から眼差される光景は、どこか一つの国が領有するナショナル・ランドスケープ—想定される「国民」に該当しない存在を排除するような「国土」—とは異なるものになる。つまり、「異郷」に留まり、そのなかに「郷」の空間を作り出した上で、もう一度「異郷」を見返すとき、国民国家の枠組みから外れた風景を見出せるのではないか。

英用と宋庸得は「郷」を見出した佐世保の収容所を囲む山を、最初は「開城に似たところがある」と言うのであるが、その後やはり故郷ではないことを改めて確認する。しかし、その直後次のような会話が二人の間で交わされる。

「山が禿げていないことも違うだろう。山は肥えているし、実はいい国なんだ」
「うむ、いい国なのだ」

英用と宋のどちらがどの発言をしたか明確でないこの会話において発話される「いい国」という言葉は、国民国家としての日本のことを指しているのではない。在日朝鮮人の民族独立運動を主導する立場の二人が、祖国を植民地にした日本を「いい国」と言うことは到底不可能なことである。しかしながら、この会話の最中に二人が見ているその風景は、「いい国」と思わせるだけのものであった。なぜならこのとき彼らが眼差しているその空間は、国民国家の枠組みから外れた、「異郷」の単なる肥えた山であったからだ。

この一見すると不可解な会話のなかに、まさにナショナル・ランドスケープを超えた風景が描かれている。それは抑圧的で、排他的な「異郷」のなかで、「郷」を見出し、差異を提示する存在として留まり続けたことによって—帰郷と同化の不断の緊張状態において—はじめて獲得された視界である。「八・一五以後」はそのモメントを描いたことにおいて、わたしたちに可能性を提示してくれるのだ。

6. おわりに

金達寿の「八・一五以後」は、「異郷」として敗戦直後日本の空間を捉え直すことで、国民国家を前提とした領土的イメージとは別の風景を描いている。しかしそれは、民族という言葉によって法的にも概念的にも日本から排除され、また同時に内なる他者としての朝鮮民族として布置されるという困り込まれた状態によって獲得された視界である。祖国が朝鮮戦争に突き進む状況なかで、「異郷」からの帰郷もかなわず、さりとて「異郷」への同化もできない緊張状態が、主人公李英用の人物造型の変化と共に高まっていく。そうしたアイデンティティの宙吊りの状態において、ヘゲモニーに対する差異の空間—「異郷」に対する「郷」の空間が生産された際に、そこから抵抗として「異郷」を見返すモメントが生まれる。

本稿が試みたのは、「八・一五以後」というテキストに描き出されている「異郷」の内実を探ることである。そして、ここで見出される「異郷」は、敗戦直後の日本という

空間を固定的で閉鎖的なナショナル・ランドスケープのイメージから解放する視座を提供する。しかしそれと同時にテキストが示すのは、「異郷」への眼差しにはアイデンティティの葛藤が刻まれていることである。そうした葛藤を抜きには得られない視界であることを私たちは忘れてはなるまい。

このような試みは、金達寿および在日朝鮮人作家による解放直後の作品の読み直しの契機になるのみならず、植民地主義から戦後日本を切り離して捉える歴史認識に対してコロニアルな状況を突きつけることを可能にする。そしてまた日本とアメリカの関係という枠内のみで想定されるような、被害者意識が内包された「焼跡」的な戦後空間のイメージの再検討を促すものであると考える。さらに、第二次大戦後の人や物、文化の移動(と滞留)に注目することは日本の状況のみに留まらず、国民国家的枠組みでの歴史記述や認識を揺るがす可能性にも繋がるであろう。

※本稿は2012年6月10日に行われた第74回日本比較文学会全国大会で発表した「金達寿戦後初期作品における「異郷」の空間表象」の内容を元にしてている。